

---

## belief - Daisuke

山野案山子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

b e l i e f - D a i s u k e

### 【Nコード】

N 1 3 3 4 E

### 【作者名】

山野案山子

### 【あらすじ】

この物語はプロローグの第一章『b e l i e f - D a i s u k e』です。主人公は、才能ある中学生野球部の四番打者、モヒカンがトレードマークの野山大助。平穏な大助の生活をガラリと変えたのは、大和との突然の出会い。そこから更に広がった新しい日常を描き、衝撃の結末のまま第二章へ続いていきます。

## 出会い（前書き）

一部シリアス・残虐な場面があり、感涙要素を含みます。

## 出会い

俺はただ早く帰りたいかった。  
歩数をぼんやり数えてみる。真夏の昼過ぎ。重いかばんをしょって、  
気の遠くなる長さの急な坂道を上る。

人一人いなかった。

部活で疲れた足を引きずりながら、もうあんな練習はやるもんかと  
心に誓った。

「えっ？」

それは炎天下でにじむ坂道の頂上に、浮き出るようにして現れた。  
前方で誰かがゆっくりと弧を描く様な姿勢のまま、うつぶせに地面  
に倒れる姿が俺の目に映った。

「ひ、人がっ！」

突然の出来事に頭が混乱した。すぐさま走って坂を上り駆けつける。  
なんだかんだいってもまだ走る体力はあるみたいで少し感心した。

「おいっ、大丈夫か?!」

かがみこんで声をかけたが、そいつは起き上がらない。

だらしなく伸ばされた手足はぴくりとも動かない。心臓の鼓動スピ  
ードが一瞬にして早まった。混乱して体から暑さが引いていく。

——熱中症か？

この暑さからは無理もない。実際俺も倒れそうな気分だった。

——大変だ……

事態を理解し、それに合わせだんだんと冷静さが戻ってきた。セミの鳴き声がまた耳に響いてくる。さっきの暑さも同時に帰って来た。

——落ち着け俺

どうすればいいか考えた。こんな事は初めてだ。金色の長髪の下に隠れた顔は下を向いていて見えない。水色の少し擦れて破れたジーパンもシャツもあちこちいびつな色で汚れている。そいつはうつろな雰囲気を漂わせていた。

「あんた、聞こえるか？」

すると自分の腕に血がついている事に気付く。

「えっ」

少年の腕から流れているものだった。

「おい、お前」

起こした瞬間、自分の血の気が引いていくのが分かった。思わず後ろに手をつく。

自分の影が退いて太陽の光が少年を照らした。

「何なんだよこいつ」

細い腕にある青いあざと血だらけの切り傷。Ｔシャツに見える乾いた血の跡。よく見れば顔にも傷がある。

また焦って鼓動が早くなつた。俺は顔をひきつらせたまま少年の胸に耳をあてる。

「死んではない……みたいだな」

金髪の不ぞろいの前髪から覗いたその閉じた目は意識を失っていた。その整った顔にはもつたいないほどの怪我が目に焼き付く。

——救急車だつ

しかしかばんをさぐりながら家に携帯を忘れた事に気付く。

顔を伝う汗が首筋から部活で焼けた肌に流れ落ちる。纏わり付くユニフォームがうっとうしく思えてしょうがなかった。

重いスポーツバッグを肩から降ろし、バットのケースを地面に置いて、野球帽子を脱いで汗を拭う。ゆっくりと深呼吸した。

「ど、どうしょ……」

ほっておいたら死ぬかもしれない、そんなことが一瞬頭をよぎった。意識が朦朧とするような暑さ。坂道を上る前にため息をついたはずだったのに。本当に思いがけない事だった。

——こついつ時どつすれば……

せみの声がやけにうるさく響いている。下り坂は暑さで揺らいで見

えた。

倒れそうなくらい強い日差しが容赦なく照りつけている。

「だ、誰かつ」

とつさに助けを求め周囲を見回したが誰もいない。

するとそいつの口が小さく開き、うつすら目を開けて、確かに呟いた。

「め……飯」

季節は真夏。聞こえたのはそいつの声と蝉の鳴き声だけだった。

少し古びたアパートの二階の一室。

散らかったこの部屋に繋がる短い廊下に、台所とトイレ、風呂場と洗面所があるだけ。

それでもそいつは一度も顔の表情を歪ませなかった。

畳の上に置かれた台の上に、炊飯器とインスタント食品のゴミ。その下敷きになったラップのかかった煮付けや野菜炒めののった皿。

部屋を見渡せばもてなすような所じゃないと情けなくなる。いつにもまして人を招き入れるにふさわしくはなかった。

「悪いな、助かったよ」

さつきから食べるペースが落ちる事はない。

他のものには目もくれず、ただがむしやらに飯を食っている。

——そうとう腹が減っていたんだ

「体、だ、大丈夫なのか？」

「全然大丈夫だ。腹減って仕方なかった」

俺は結局“生き倒れ”のそいつを家に連れて帰って、飯を食わせてやった。

「あんたよく食うな……」

特にご馳走ではない。残りものだった。茶碗の上に盛られたご飯、焼き魚にあえもの。母さんが一番最近に作った料理で、帰って自分が食べようと思っていたものだ。

それでもそいつはうまそうに食っていた。それを見ると人を助けたという感覚が溢れてくる。

「三日くらい食ってなかったから本気で死ぬかと思ったよ」

——三日？

俺はそういつやつをドラマでしか見た事がなかった。

「なあ……」

「えっ？」

「お、おかわり……いいか？」

そううつむいて言う姿にどこか笑いそうになった。

大人びた顔つき。せっかちにはしを動かす横顔に思わず見とれる。  
その美味しそうに食べる様子に不思議と親近感さえ沸いた。

——歳は二、三くらい上かな、どこから来たんだろ？

疑問は募るばかりだが、とにかく顔や手足に見られる生々しい傷痕が気になってしょうがない。ずっとなぜか聞くに聞けなかった。

「その怪我……」

それでもおそろおそろ聞くと、そいつはパツと箸を持った手を止めて視線を俺に向けた。

「気にするなよ。大丈夫だから」

爪楊枝をくわえ、カチカチと歯を鳴らして下から俺を見上げている。

「き、気をつける……よ？」

「どーも」

視線が離せない。ただ啞然と止まらないその食いつぷりを眺めた。

——こいつ今まで何してたんだろ

乱れている少年の姿に目がいく。

「あのさ、風呂入っていけよ。俺の服貸すから」

箆笥からタオルを引っ張りだしてきてそいつのもとへ持って行った。  
畳の上のものを蹴散らしながら。

「なにからなにまで……悪いな」

俺に軽く頭を下げて、申し訳なさそうな顔をしている。何故かこっ  
ちまで申し訳なくなった。

「ゆっくりしてっつていいからさ」

皿や茶碗を積み上げながら俺は出来るだけ普通にふるまっ。

「ありがたいよ」

「本当に、大丈夫か？」

「こんなの平気だよ」

俺が何度大丈夫かと聞いても平気だと答えた。

扇風機の風がそいつの明るい髪をなびかせる。

窓を開けた。

それでも中に涼しい風が吹き抜けて来る訳ではない。窓から見える景色がぼんやりとしていた。

「ご馳走様、本当に感謝してる」

箸をそろえて茶碗の上に置いた。

「ごめんな、なんも出せなくて」

するとそいつは顔を上げた。

「何言ってるんだよ。最高にうまかった」

俺の目を見てそう言った。立ち上がって用意したタオルを手取る。

「じゃあ遠慮なく、使わせてもらっよ」

そう言って立ち上がった。笑顔のどこかに淋しげな色が見える。

タオルを背中に抱えて風呂場に向かう後ろ姿がなんだか痛々しかった。

ご飯つぶ一つ残さず綺麗に食べた跡の茶碗。炊飯器はもうからっぽに近い。

扇風機がからからと回る音がする。

自分の熱い体温がさらに熱くなるのを感じた。

——見知らずの他人じゃないか

分かっているのになぜか心配に思えてくる。スポーツバッグを押しのけ、グローブとバットを壁に立て掛けた。

第四東中学校硬式野球部四番打者。

この肩書きが今の俺の全てかもしれない。バットを見ながらふとそんな事を考えた。

地元の無名中学での始まって以来の広告生徒だと、お気楽な校長にいつも背中を叩かれている。

この辺りでは有力バッターとしてそこそこ知れ渡っているらしいかった。

有名高校が俺の活躍に注目していて、将来有望な野球選手としての期待がかかっているという。

毎日練習の日々。

野球界で脚光を浴びて生きる自分を夢見ながら。

とは言え、のんきな監督に気さくな仲間。俺はただ野球が楽しかった。

「はーっ……疲れた」

まだ一日の昼間なのに何日分も練習した気分だった。どっと疲れが押し寄せて来る。部屋を片付けるつもりが余計散らかってしまった。汗だくのユニフォームのまま横になる。

「駄目だ、眠い」

皿や茶碗をまた台に置き戻した。

相変わらず夏を思い知らせるかのようにせみの鳴く事を止めず、住宅街どこでもその暑苦しい音が聞く事は出来る。

——あの怪我じゃ風呂しみねえかな……

頭に浮かぶのはそいつの事ばかり。普通でないことは見た目から明らかだった。

——こんなことがあるもんだ

俺にはありきたりな、なんの変哲もない日常から飛び出たような出来事。試合で思わぬ好成績を残すより見慣れないような事。

——あいつどうするんだろ

外はせわしい時間が流れているのに部屋にはただ静かな暑さが張り詰めている。

しばらく放心状態で、ついにはうとうとして、すーっと眠りに落ちていた。

袋がシャリシャリとする音で俺は目を覚ました。  
あいつが置いてあったスーパ―の袋の中に、回りに散らかっている  
ゴミを拾っているの見える。半開きの目の中に映る象を夢うつつに  
眺めた。

「あ、悪い。起こしたか？」

はっとして正気になり、俺は慌てて飛び起きた。

「そんな事なくていいって！もともと汚い部屋なんだから、あが  
ったんなら声くらいかけるよっ」

頭がぼーっとしてようやく自分がそいつを助けて今に至る事をはっ  
きりと理解する。

「服、ありがとな」

「いいよ、あんたの洗濯しくから」

簡単に回りを片付け始める。決まった場所に直すというよりただス  
ペースを空けるために積み上げているのに近かった。

ユニフォームを脱いでＴシャツに着替える。ソファーに座りながら忙しく動き回る俺をそいつは見つめていた。

「お前ここに一人で住んでるのか？」

「いや、母さんと二人だけど？」

「そうか」

部屋には鏡面台に化粧品やハンガーにかかった女物の服や脱ぎっぱなしの服がある。

「だらしねー母親だろ？……あ、母さんが帰る前に買い物行かねえと」

時計を見た。部屋の隅に置かれたテレビの上、そこにある時計はもうすぐ５時をさそうとしている。

「あんたも……一緒に来るか？」

そいつと目があつた。

一日のうちごくまれな時間にしか見られない藍色の空が窓から俺達を見ていた。

気持ちのいい風が吹き抜け、昼間の暑さとは比べ物にならないくらい涼しい。

だんだん色づいてきた空をを見ながら俺達は二人で近くの商店街へ向かった。

「野球やってるんだな」

そいつは急にそんな事を言った。

「えっ……あ、うん。ちっさい時からやってる」

——もしかして野球好きなのか？

ちらちらと無意識に見てしまう。野球の話なら少しは会話が続くと思っただがとてもそんな風には見えない。

「面白いかな？」

「まあ……な、野球興味あるのかな？」

そいつは隣で、地面の細長い影をじっと見つめながら歩いている。俺がそっちを向くと、そいつもちらつとこっちを向いた。

「別にそんなんじゃないけど、そういうのなんかいいな」

「って何が？」

「いや……なんでもねえよ」

掴めない会話が俺の頭の中に響いた。

——なんだよこいつ？

昼間はつきり見えた雲がどんどん裂かれて行き、薄くなつて遠くに流れ影は濃く長くなつていく。

「えつと……あんたどこに住んでんだよ？」

とりあえず知るべきと思う事を聞きたかった。  
倒れていた理由や怪我の原因も分からない。

「俺……そーゆーの全然ねーんだ」

「え？」

金髪がなびいて筋の高い鼻が見えた。俺の目にはそいつの目がどこか遠くを見ているように映っている。

大和はしばらく何も言わずにどこか一点を見つめていた。

「俺は……」

どこか悲しさが見える気がする。

——なんだその顔

透明な目に浮かぶ何かが見える。どこか穴のあいた表情が気になる。

結局大和は何か言いたげだったが喋らなかった。

「家とか、家族とか全然……分からない、関わった覚えがないんだ」

——どういう意味だよ？

「覚えがないって……じゃ、じゃあ今までどこで何してたんだよ」

「それも……よく分からない」

うなだれるように、しかも落ち着いた口調で答える。

頭がおかしいのかと心配になった。記憶を失ってるかもしれないとか勝手に推測してみたりもした。

——まずい事言ったかな

言っている事が全く理解出来ない。答えたくないのか答えられないのか、どっちにしろ言葉につまった。

——聞かない方がよかったかもしれない

頭には疑問と心配が交差したまま残っていた。

「ところで、ここはどこなんだ？」

そいつが足元に転がっていた石を蹴り飛ばした。

「あ……ああ、ここは桜川町の東町ってところ。分かるか？」

「やっぱ知らねえや」

少し笑ったそいつの顔をちらつと見る。

「ほ、本当にさまよってたんだな？」

「みたいだな」

蹴った石が電柱に当たってカンと音がした。電柱の影は随分長く伸びている。

「残念だけどここはなんにもないただの田舎町。そんないいところじゃないよ」

大企業のビルがそびえ立つ敷地も近くにはないし観光客で賑わうスポットもない。極普通の町。別に不満はないが自慢出来るものもなかった。

「そうか？でも……見るよあの景色」

そいつは立ち止まって、目の前のオレンジに染まった山が並ぶ方を見つめた。並みに綺麗な景色ではあった。

「ど、どうしたんだよ？」

俺も思わず立ち止まる。景色以外の何かを見ているような目つきをしていた。

「俺が見てきたものより……ずっといい」

「えっ？」

そいつは一瞬うつむいた。小さな背中に光が当たる。

「いやっ……なんでもねえよ」

“なんでもねえよ”と言った時に俺は気になって仕方なかった。

「ま、景色は田舎だから……」

その表情はなんとも言えなかった。もう少し明るい目をして同じセリフを俺に言ったら、きつともっと返せた言葉が沢山あったかもしれない。

「いい所だと思う。俺みたいな浮浪者を拾ってくれる奴が住んでるじゃないか」

ニコツと笑ってまたそいつは歩き出す。

「え？いや、まあそれは」

俺もついて行くように足を動かす。二人で顔を見合わせて笑った。何かがあるのかもしれない事はもう言うまでもない。でも俺が聞くとその小さな背中が壊れてしまいそうな気がして、これ以上詮索しようとは考えなかった。

住宅街を抜けると商店街が見えてきた。

とぎれとぎれの会話だけが聞こえた。話が飛び交うわけでもなければ無言になる事もなかった。

「俺、大和」

商店街の入り口にさしかかった時。もう影は細長い棒のようになっていた。

「えっ？」

ぱつと振り返って優しい目をして俺を見た。ポケットに手をつっこんで肩をすくめて。きゃしゃな体だと改めて思う。俺の貸した服はそいつにはやっぱり大きかった。

「桜木大和。俺の名前」

その時なぜかその一言が俺の心を熱くさせた。

何かが力強く動く。

「あつ、えつと……」

いきなりで言葉が出てこない。

「俺、大助……です」

なんだかやけに照れくさい。

「大助、今日は本当ありがとうな」

そいつ、いや大和のその言葉で不思議と俺は嬉しい気持ちになった。

俺達はずっと遠くまで長く伸びるあぜ道を歩いた。この道は隣町までつながっている。

「悪いなあ、付き合わせて。荷物まで持ってもらって」

「何言ってるんだ。謝るのはどっちだよ」

横に流れる桜川は昨日の雨でかさを増し、いつも穏やか流れが少し早くなっているように思う。

「晩飯も食っていけよ、たいしたもんないけどさ」

「なんか……迷惑かけて済まないな」

「気にすんなって」

小学生の登下校にもよくここを歩いた。

朝早くに犬を連れた人が散歩したり、ジョギングする人も見かける。今でもこの道は昔と何も変わらなかった。

ふと、向こうに見える橋の上から誰かが下を見下ろし、声を上げているのが見えた。

「あれ……なんだろう？」

俺は目を細めてこらす。

「えっ？」

大和も視線を移す。誰かが大きな橋の下の川に向かって、落ちそうなくらい身を乗りだして叫んでいる。橋の下にも影ではつきりとは見えないが何人か人がいる様だ。

「なんかあつたのかな？」

川も橋もこの辺りでは一番大きい。この道から向かい側の道まで100メートルくらいある。

深さは分らないが小さい頃近所の友達と河辺で遊んだのを覚えてる。泳ぐな危険の看板に落書きしたりもした。

「おい、あれ見ろ」

大和は川辺から相当向こうにある橋の柱を指差した。

「あつ、あれ」

川のと真ん中にささる柱に誰かが捕まっている。流されそうになりながら、しがみついているのが見えた。

「人だ、誰か助けっ……て、おいっ！」

大和が駆け出して行く。

「ま、待てよっ！」

俺も慌てて追いかける。あぜ道の坂をこけそうになりながら土手を降り、川の側まで大和と走っていく。

買い物袋が走ってる最中何度も足に当たって邪魔をする。いつもは緑の草だらけの足元は、夕焼け色に染まり静かな風になびいていた。

橋の下は大きな影に覆われて少し暗い。駆け下りる時につっかけのサンダルが小石をはじく。土手が少し急で滑りそうになった。

「あ、あんたらも手伝ってくれよ！」

190センチはあるだろう。とてつもなく長身の男が、走って来た俺と大和に向かってそう言った。

「どうしたん……ですか？」

見た感じまだ若い。作業服を着て頭にタオルを巻いている。まくった袖から見えるたくましい腕はロープを引っ張っていた。他に後ろでロープを引く二人の少年、見たことのある制服。白のカッターに黒のスボン。西中の生徒だ。

「説明は後だ、頼むっ」

その瞬間パツと大和が買い物の荷物を地面に降ろし、そいつらの後ろに周りロープを引っ張り初めた。

「大助っ！」

「わ、分かってるよ」

俺も大和の後ろに回り込んで手を貸す。このロープの先は川にいる少年に繋がっていた。

上がってこられなくなったのだろうか、川の水は首まで浸かっている

「もうこうなったら俺が飛び込んで……」

「待てよ恭介、お前が抜けたらロープがっ」

前方でやりとりが聞こえる。

ロープを握る手が熱くなっていくのが分かった。それもそのはず、このロープは物凄く細い。人を助けるようなロープではなかった。

「竜！離すなよ、自力で戻ってこれないか？」

さっきの長身の男が叫んだ。

近くで見れば川の流れはいつもより相当速い気がする。遠くからは聞こえない流水音は轟々と止まない。

「全然駄目だぞ、竜流されるかもよ」

橋の上から声が聞こえた。大きな橋に響く。

「このままじゃまずいぞ……」

一番前でロープを引っ張っている大きなそいつが頭に巻いたタオルを取って首にかける。オッサン臭い感じだったが案外年は離れてないかもしれない。

何にしるこの辺りでは見かけない連中だった。「全然動かないな

……」

大和がぼそつと言う。男五人で懸命にロープを引っ張ったが何も変わらない。

川辺付近にはまばらに草が生えていた。砂が広がりや石が転がる地面で俺の散歩用サンダルがじりじりと音を立てる。

「い、一体っ……なんだっていうんだよ」

俺がそう言うのと西中の奴が一人、こっちを向いた。

「二人共手伝わして悪いなあ、アイツが馬鹿な事するからっ……さあっ！」

金髪にピアス。柄の悪い西中の象徴である。立てた両側の襟から覗く金のネックレス。センターで分けられた長めの金色の髪。そいつは割と男前だった。

「正也、邪魔だ。こっち向くなよ。」

そいつの後ろにもう一人の西中の奴がいる。ロープを引っ張る後ろ姿しか見えない。

「なんだと？てめえこんなところで俺に喧嘩売ろうってのか？」

おいおい、と俺は西中の例を見せられている気分になった。

俺のいる東中にこんな奴がない訳ではないが、西中には多分こんな奴しかいない。

「お前ら川に落とすぞ」

あのでかいのが低い声でそう言った時、騒がしい空気を避けるようにして俺の耳に届くものがあった。

「えっ……猫？」

猫の鳴き声がする。しかも川の方から。

「竜の猫だよ、あの溺れてる奴の飼い猫。」

大和の前にいる西中の奴が振り向かずに喋る。俺は思わず足が滑り大和の髪が顔にかかった。

「猫って…でもなんで」

「おい、このロープ……」

大和が呟く。

「えっ？」

「おいっ、ヤバいぞロープ切れそうじゃねえか！」

さっきの金髪が声を上げる。

「だいたいこんなロープ無茶なんだよ！うらあっ！」

でも五人がかりで引っ張ってもあの少年が引き上げられないのが疑

問だった。

「悪かったなあゝ正也、しょーがねえだろこれしかなかったんだから。お前川飛び込めよ？あれ？お前泳げないんだっけなーあ？」

また橋の上から声がする。天井にわんわんと響く。上を見上げればその固い石膏の橋は意外にも高いところにある。また金髪の奴が大声でわめき始める。

その時。大和が急にロープを手放して川辺に向かって走って行った。

「おっ、おい！」

俺の前からまたパツと走り出したかと思えば川に飛び込んだ。

「はっ！？ちょ、お前！」

ロープに手をかけながら向こうにいる少年の元に行こうとする。

「なに？！……あいつ、なかなか勇氣あるじゃねえか！」

「お前は泳げないだけだろうが、おい恭介。ロープ切れるぞ？」

そんな西中の奴らのやりとりもぼんやりとしか聞こえない。大和のとっさの行動に目がぱちぱちする。

「あいつ……大丈夫かよ」

見ると大和はもう柱の近くにいます。ロープを両手で握ってはいるが肩まで川に浸かっている。かなり深いみたいだった。

「おい兄ちゃんっ、どうだ？ いけそうか？」

前方である男が川に向かって声を上げる。その高い身長からか背が一人突き出ている。

大和は少年の辺りまで行くと水中に潜った。

——あいつ、大丈夫かなっ……

心配になる。ロープを思わず強く握る。

——こんなロープで……

大和は決して頑丈そうには見えない。水流に紛れて流されてしまうんじゃないかと思ってしまう。

むしろ体つきには自分のほうが自信がある。日頃の筋トレで鍛えた野球部員、力もそれなりにあった。

川の水が夕日に照らされてきらきら光る。この位置からは向こうの様子ははっきりとは見えない。

——まだかよっ

今か今かと焦る。かすかに見える柱にしがみついている少年、その近くで浮き上がる大和の姿を探した。

大和が潜ってやけに長い時間経った気がした。

——何してんだよ、早く上がって来いよ

ロープを引っ張る事から意識が離れている。気になって仕方がない。

「おい、お前！あいつ大丈夫なのかっ？」

大和の前にいたやつが後ろに下がりながら言った。

「えっ……あ、いや……よく分かんねえよ」

「なんだよそれ？このままだとあいつも巻き沿いくらいかねないぞ？」

——今日会ったばかりじゃないか

本当に何も知らない、でもほっとけないというか人事としておけな

いという複雑な気持ち。

「あっ」

ようやく大和が水面から顔を出した。

何か叫んでいるが遠すぎる。勢いある水の流れる音で聞こえない。

「なんて言ってんだよ？聞こえねえよ！」

柱の下で懸命に流れに逆らい何かを伝えようとする。

かき消される大和の声、見てる限り大和に余裕はなさそうで、なんとかしなければならぬという意識が高まる。

「ロープがつ」

「えっ?!」

ロープを強く握る手のひらに、先端でビリビリと裂けていくような感覚が届いた。

「ヤバいつ!!」

「おい、ロープがつ」

「駄目だっ、切れるっ!!」

西中の奴が声を上げた瞬間、先頭でロープを引っ張っていたあの巨体がこっちに倒れる姿が映る。

「ひっ!?!」

ロープが千切れたのは一番後ろにいる俺にもすぐ分かった。

「うわぁっ!」

すぐに俺もその反動で後ろに背中から地面に強打。上にかかる橋の黒ずんだ天井が見える。

前にいた西中の奴が俺の上に倒れて来る。

結構な力で引っ張っていた事がその打ちつけをくらって分かった。

「うつ……ってええ」

背中がジンジンする、でも幸い草がまだ生えてる辺りに倒れて衝撃はましな方だと思った。

「わ、悪い……大丈夫か？」

俺に倒れて来た奴がパツと飛び起きて俺に頭を下げた。

「全然いいって、大丈夫だから」

背中をさすりながら俺も体を起こす。そしてはっとして川辺に走った。

——あ、あいつはっ？

「えっ……」

俺は思わずまばたきした。

「しまったな……」

隣で長身の奴がため息をつく。

「うそ……あいつ!」

もう川の柱に大和とその少年の姿はなかった。何もなかったかの様にそこを水が流れている。柱に当たって打たれてはまた流されていく。

「なんてこった……」

そう言っただけで座りこむ。

勢いある動く水面にもう人影は見当たらなかった。

ところどころ黄ばんだ木の台。少し狭い椅子に並んで座った。

屋台の電気に照らされる渦巻模様の器。汁をすする音が聞こえる。

「三郎のロープのせいだな」

「はっ?俺かよ!」

熱いラーメンの煙を、恭介というあの長身の男の煙草の煙が突き破った。

「あのなあ、普通屋台にあるロープなんてこんなもんだろっ？」

橋の上から様子を見ていた少年が、さっきの切れたロープを掴んで見せつける。

三郎と言っらしい、ラーメン屋の屋台をしている。とにかくメツシユが入りまくった奇抜な髪型。エプロン姿に不釣り合いでおかしかった。

あの騒動の後、橋の上にあるそいつの屋台に座らされ、今ラーメンを食べている。

勿論大和とあの少年はいない。川辺で待っても二人が現れる事はなかった。

この川でこんな事件が起こる事はまずなくて、俺も驚かされたくらい。

それでもこいつらは救助隊を呼ぶでも警察に通報するでもない、俺も呑気に屋台に腰掛けてしまっていた。

——こんな事してていいのか……

助けに行こうと団結はしない、ましてや悲しむでも諦めるでもない。

気が抜けてきた。

ポカンと川を見つめている俺を引っ張って連れて来たのは、向かい側にいる恭介だ。隣には西中の奴が座っている。

「竜が悪い、それに尽きるだろ」

俺の隣にいる茶髪の奴がそう言っただけ。既にラーメンは三杯目。西中の俊一とその横のあの金髪の正也。

「てかさ、お前東中のモヒだろ、モヒ。」

「えっ？」

正也はチャラチャラしているが俊一はクールだ。ラーメンのなるとが嫌いなのか俺の皿に無言で移してくる。

「そうだよ、俺も思った。野球部の」

野球の事で俺の話聞いた事があるという。西中とは何度か練習試合した事があるがあの悪態は連盟から苦情をもらうほど。

——ていうかモヒって何だよモヒって……

頭のもヒカンは俺のトレードマーク。親父がずっと切ってくれていたらしい。でも俺が五歳の時親父は死んだ。それから自分でやっている。何度か学校から注意されるが、母さんも気に入っている。何故か変えようとは思わなかった。

「まあなかなかいいと思うぜ、その髪型」

三郎に言われるとなんだかおかしくて笑いそうになる。赤に青とブレンドの紫のメッシュが高く伸びるアートなヘアスタイルをまじまじと見る。

でも色黒な肌によく似合っていた。

「問題は大助がなんでモヒカンなのかって話だよ」

いや違うだと俺が眉間にシワを寄せると恭介が咳払いした。

「そつだよ。お前よくそんな髪で野球出来るな」

そう言つて割り箸で俺の髪をちよいと指す。

——その竜つて奴を助ける方法考えないのかよ……

「いつその事ギャングみてえに真っ赤にするか？」

たわいもない会話は憎めないが、事態の深刻さはラーメンの匂いに消されそつだ。

——流されてたよな。生きてんのかな？

俺はまだ麺三本しか食べていない。さつきからなるとばかり食べている気がする。

——あんたは……今どこにいるんだ？

すっかり暗くなった景色が、赤いのれんの隙間から見える。小さい星が輝く。

夏の夜。肌寒い空気はラーメンに最適だった。

「あ、俺思っただけど川の下流にあるダムに行ってみないか？」

恭介がやつとその話題を持ち出した時、既に正也と三郎は酔って隣で寝ていた。

「下流って？」

俺の器には俊一の間とはもつない。汁だけになっている。割り箸を器の上に置いた。

「下流にせき止めのダムがある、下に降りれるからいかだで上流に行くしかないな」

恭介の煙草は苦い匂いで鼻にくる。ごついジッポライターが手元に置いてある。さっきまで灰皿は空っぽだったのにもう吸い殻は積まれている。恭介は重度の喫煙者だ。

「でもな。どつかで溺れて死んでるかもしれないぜ」

俊一も酔いつぶれて顔は真っ赤。こげ茶色の髪をかきあげて水を飲み干す。

「演技でもねえ事言つなよ。そうと決まれば行くぞ」

恭介が勢い良く立ち上がる。のれんの棒に頭を打ちつけて俊一が笑った。

「行くつて……？」

「いかだ造りに決まつてんだろ」

頭をさすりながら俺を見下ろす。俊一の方を見ると、恭介を指差した。

「こいつの家材木屋なんだ」

「材木屋？」

「函材木屋男前の恭介とは俺の事だ、以後お見知りおきを」

恭介はニヤリと笑つて三郎と正也を叩き起こす。酒臭い正也が俺の膝に倒れこんできた。

「出発は明日の朝。大助、お前はとうする？」

恭介の低い声はよく聞こえる。

三郎がごそごそと片付けを始めた。

「どうするつて……」

「一緒に行くか？」

——あいつを助けに……

俊一が自分の前にある六杯分の器を重ねながら俺をチラッと見る。

「行くよ、俺も行く。いかだも手伝うから」

恭介が俺の肩を叩いた。

「そうこねえとな」

他人を助けるために他人と関わるのは初めてだ。大和についても何も知らないし、こいつらも同じ町に住んでいても今日初めて会った連中。

——でも行かないと

「おい正也いい加減起きろっ！」

俊一が正也の襟首を掴んだ。ガチャガチャと三郎の皿を洗う音が聞こえる。

「大助！いすあげてくれっ」

下から声がして俺もいすの端にある支えに手をかけた。

——今頃どうしてるかな

屋台ののれんをくぐると少し冷たい外気に包まれた。橋から下を見下ろすと相変わらずの勢いで川の水は流れている。

俺は明日、初めて部活を休む事にした。

「てめえ正也サボってんじゃねーぞこらっ！」

恭介の怒鳴り声が木の香りの立ち込める作業場に響く。俺は恭介に怒鳴られないようにせつせと手伝った。のこぎりやチェーンソー、金槌や釘があちこち床に散らばっていて危なくてしょうがない。

「いいか？設計通り作らねえ奴はノコギリの刑だ」

まさか夜中にいかだ造りをする事になるとは予想もしなかった。

途中積み上げられた木材の影に隠れて休憩している三郎を見かけたが恭介には内緒にした。

函材木屋は商店街の奥にある。先祖代々とか恭介は言うが親父さんが経営しているのを手伝っているらしい。

オッサン臭い雰囲気から想像していた年齢とは大違いで、まだ恭介は二十歳過ぎたばかりだった。

「モヒ助、お前力あるな。さすが野球部」

正也はたいして手伝いもしないくせにやたら疲れた休憩だなどと言っては座り込んでいる。

「なあ、なんであんな事になったんだよ」

タオルで汗を拭いた。大きな丸太の上に腰を降ろす。木くずが足元に散らばって歩く度に舞い上がる。俺が質問すると正也が腕を組ながらため息をついた。

「あの溺れかけてたバカは竜って奴で……まあ背も気も小せえし弱っちいけど。あいつの猫が溺れて助けに行ったら戻ってこれなくなっただけ」

「それで猫が……」

「意味わかんねえだろ？あ、ミミイだミミイ。猫の名前な、真つ黒なんだぜ。神社の前に捨ててあったのを竜が拾ったんだ」

「その竜って奴も西中なのか？」

「ああ、俺と俊は三年で竜は二年、モヒ助は？」

西中にそんな奴がいる事に少し驚いた。

「俺も二年、竜って人と一緒」

正也が気に入ってるみたいからモヒ助につっこむのは止めた。

「竜と偉い違いだな！」

笑いながら腕の筋肉を触る。

泳げるくせに助けに行けなかった事が情けない。もしかしたらこんな事態を防げたのかもしれないと思ってしまう。

——助けられるかな……

向こうで俊一と恭介が組み立て作業に取りかかっていた。

三郎がアートの係だとペンキ缶を両手いっぱい抱えて歩いてくる。

「あと少しだ……」

俺もタオルを頭に巻いて面倒くさがる正也を連れて材木を運ぶ。

コンクリートの床に敷かれたブルーシート。その上にある奇妙な作りかけのいかだ。

「竜生きてつかなく」

三郎がペンキの刷毛を頬に擦り付けながら眠そうな顔をして言う。

「……心配？」

「ぼちぼちな」

笑ってあくびをした。

「でもあいつらの方が心配だろ」

いかだの側で何か言い合いをしている俊一と正也をあごで指す。

「えっ？」

「あいつら学校でも一緒にいるし、竜がいなかったら俊と正は今頃一緒にいねえんじゃない？」

竜という奴があのだ二人を仲良くさせたらしい。もともと西中でも有名な俊一と正也。性格は正反对、仲が悪かったという。

「竜は二人の知り合いだったみたいで、今では三人仲良くラーメン食いに来るよ」

軽い感じの正也に比べ俊一は硬派だ。目つきも話し方も全然違う。顔だつてめちゃくちゃ格好いいし、絶対モテると思った。

「俊は頭も良いんだ、正や竜といないけりや全然違うんだぜ？」

何度も俊一は恭介にこの設計で大丈夫かと問い詰めていた。確かに頭は凄くキレそうだった。

「しかも強い、あ……こっちは正也もな」

「強いつて？何が？」

俺がぱつと三郎を見るとシュシュッと蹴ったり殴ったりする仕草を見せる。二人共西中で評判のコンビらしかった。

窓から日差しがうつすら差し込みかけていた。  
夜が明ける。

「できたーっ！」

恭介がガッツポーズした。  
一晩かかって作りたいかだは三郎のアートセンスのおかげか随分と  
ユーモアある仕上がりとなっている。

途中正也と俊一が取っ組み合いになり凄まじい喧嘩もあつたし、三  
郎がペンキをひっくり返したりもした。

「やっとか、てかこの模様何だよ!？」

でもそれなりに楽しくてすっかり俺はこいつらと意気投合してしま  
っている。

正也がコンコンと側面の妙な模様を叩きながらあくびをした。

「なあ、マジ眠いんだけど……」

へなへなとその場に座り込む。

俺もかなり疲れて目がぼんやりしてきた。まぶたが重い。

「何言ってやがる?今から行くぞ、さっさと車に積みな」

恭介はポケットからキーを取り出して奥のシャッターを開ける。車庫から軽トラやでかい工事用トラックが顔を出した。手前のシャッターを三郎が持ち上げると、薄暗い外の景色が作業場に流れ込んで来た。

シャツをまくって背伸びする。

——いつもならもうすぐ部活が始まるのに

いろんな事があり過ぎた。

恭介の軽トラに乗り込む。じゃんけんで一人チョキを出して勝った三郎は助手席、運転手恭介を除く残りの三人は荷台に乗った。

「こつからダムまで40キロくらいある、最短コースで行くから振り落とされないようにしっかりと捕まってるよ」

シートベルトをする様子が後ろから見えた。散らかった荷台。タイヤや丸められた真つ黒の堅いシート。ホースや作業道具に、何故か最後に履いたのがいつか分からないような靴下が長靴にひっかかっている。

「モヒ助、そんなとこ持つてる様じゃ駄目だぜ？」

「えっ？」

正也がやれやれと足元の太い手すりをガツンと足で蹴る。

「こつちにしとけ！」

「わ、わかった……」

見ると俊一は両手で手すりを持ってうつむいている。

「しゅ、俊一？どうしたんだよ？」

俺が声をかけても顔をあげない。

「……なんでもねえよ」

すると正也が笑いながら口笛を吹いた。

「恭介っ！俊がいつもよりぶっ飛ばしてくれてさあっ！」

楽しそうにそう言う。

「言ってねえよボケ！」

パツとあげた俊一の顔は真っ青だった。

鋭い目つきで、後ろから左足で正也の背中を蹴った時。

「わっ！……」

恭介がアクセルを勢いよく踏んで道に出た。

眠気なんか一気に覚めて、心臓を落つことすかと思うくらい浮遊感を味わった。

いかだをくくっている縄が外れたかと思った。強い衝撃に正也一人歓声をあげる。

人のいない道を、薄暗いこの時間凄いスピードで走る軽トラは恐らく相当滑稽だ。

「とっ、飛ばしすぎだろ……」

風の音が凄い。耳を貫いていくように空気が流れる。

「ひょーっ！最高！」

正也はやけにハイテンションで手を手すりから放し、目をつぶっていかだにもたれ掛かっている。歌まで歌い出す始末だ。

「お？どーした俊一??」

正也がおちよくつても俊一は無言で俯いたまま。

「何キ口だしてんだよ!？」

俺が聞くと得意げな顔をして閉じていた目を開けた。

「まあーこれくらいかな？」

正也は手のひらを突き出す。

「はっ？90?!」

——高速道路かよ？

「まだクライマックスがあるはずだぜ？」

西中がもつすぐ見える。俺は次々と景色を駆け抜ける様子を、うつすらと横目で見た。

連なる山を背景に、家がまばらに見えて畑や田んぼが広がっている。時々電柱に当たるかと思つて冷や冷やした。

恭介の運転はめちゃくちゃだ。少し段差を車が通っただけで激しく揺れ、若干の下り坂に足が一瞬浮くほど。

助手席に座つてゐる三郎の立てた髪がびよこびよこ上下する。

「きたぜーこの坂は熱い！」

正也はジェットコースターにでも乗っている様子。

割と急な坂を上り始める。ふと側で俊一の荒い呼吸が聞こえた。

「……大丈夫か？」

「これくらい……大した事ねえよ」

とは言っているが当人はかなりキツそうだ。

頂上についた時、町を一望した。住宅地や小学校に公園も見える。

「モヒ助、来るぜ？」

「へっ？」

俺は決して絶叫マシーンが苦手な訳ではなかった。

でも下りにさしかかった瞬間。一度落としそうになった心臓が、あまりのスリルに煮えくり返った。

「よし、着いたぞ！早く降りろ」

恭介が車のドアをボタンと閉める。首をひねりながらあくびをした。

「うーん真っ直ぐだな、水泳大会が出来る」

「っ……着いた」

俺はよたよた荷台から降りた。

振り返ると、山中の登り道の途中にある大きなダムが見えた。ダムにせき止められているため、街のそれとは比べものにならない。

下流沿って幅は狭く流れもゆるやかになっている様で、恭介が泳ぐ  
と言い出すのも無理はない。

「うぁー！楽しかった」

正也は相変わらずだ。

案の定、俊一は軽トラから降りるやいなや、裏でゲロを吐いてしゃ  
がみこんでいる。「こいつはこっぴどいのが苦手なんだよ」

弱っている俊一の肩を恭介がバシバシ叩く。

ピンピンしてるのは正也と恭介だけ。

俺と三郎もげっそりだった。三郎のあの元気な髪もしおれた花の様  
にねてしまっている。

「こ………今回もスリル満点でしたね」

そう言いながら三郎は深呼吸した。

まだ辺りは薄くて足元もはっきり見えない。

あの気を抜けない軽トラの荷台から、固いコンクリートの地面を歩  
いた瞬間ほっとした。

「竜……っ！あああああ！」

三郎が力いっぱい叫ぶ。こだまする声が道を駆けめぐる様だ。

「おーおーまるでハイキングだな」

「おいバカ止めろよ、朝っぱらから近所迷惑じゃねえか」

「うらあああ！竜っー！生きてるかあー」

恭介の注意の後、すぐさま正也も負けじと叫ぶ。しまいに恭介も発狂しだした。まるで山びこ大会だ。

俺はすっかり顔色を悪くして一人軽トラにもたれる俊一の隣で、自然の景色を眺め回した。

「うえっ……」

うつろな目をしてため息をついていた。

「だ、大丈夫じゃ……なさそうだな？」

「恭介のやつ……許さねえ」

暗い森というのは気味が悪い。さっき走ってきた道に比べて、山に囲まれたこの場所はどんよりとした空気に包まれている。三人の叫び声が渦巻いている。ガードレールの向こうに見える木で埋め尽くされた土手は真っ暗だ。

「いかだを降ろせ、運ぶぞ」

叫び終えたのか、カチツとライターの音がして、恭介の苦い煙草の匂いが鼻に届いた。

「あーマジ疲れた……」

そう言っただけで正也は地面に座り込んで大の字になる。荷台にいかだはしっかりとくくりつけてあった。恭介がどんな手荒

な運転をしても、決していかだは落ちなかった。が、反動はかなりのものでよくここまで運べたと正直関心する。

手分けしてロープを解きにかかる。時々ひんやりとした風がシャツをめくった。軽トラの荷台の冊が冷たい。

タイヤに足をひっかけてよじ登り手を伸ばす。恭介は長い手足で楽々と作業をこなした。

「おい大助……向こうになんか見えないか？」

「へっ？」

三郎がいかだに手をかけながらダムの方を見て目を細める。

「いや、別に何も……え？あつ……」

俺も荷台のタイヤにかけた足を止めた。

「人影？」

ダムの当たりに何か動く影がある。目を凝らすが小さくてはつきりと見えない。

「どうした？」

そう言つて恭介が三郎の顔に煙を吹きかけた。

「誰がいる……」

「早朝だしどつかのじーさんだろ」

「そう……だな」

作業を再開する。

向こうの山から淡い光が漏れ始めた。きらきらと軽トラのフロントが光る。足元が明るくなつていった。

俊一はぐつたりで正也はうとうと眠りかけている。夏の早朝の気温がこんなにも涼しいなんて思いもなかった。普段炎天下のグランドでランニングやノックや筋トレをしているからかやけにそう感じる。

いつもなら今頃まだぐつすり眠っているはずなのに人生何があるか分からないとはこの事だと思つ。

「なあ……あれ、ぜってーじーさんじゃねーだろ」

三郎はまだダムの方を見ていた。眩しそうな顔をしながら。

「あれ……もしかして」

太陽が上る。

俺も思わず眩しさに顔の前に手を当てた。光の筋が空に向かって伸びて行くのが分かる。空が明るくなつてきた。

——えっ???

俺の心臓がドクンと脈をうった。

「大和……?」

俺が呟いた瞬間。影が動いて手を上げたのが分かった。

——ウソ?

「竜、竜——っ!」

三郎が走り出した。

「あ、あいつ!」

向こうから誰かを抱えてこっちへ歩いてくる。小さな人影ではあるが間違いなく大和だ。

——助かったんだ

その光景は何故か、俺に衝撃を与えた。脈打つ血流がよりリアルに巡っているのを感じ、膝が微かに揺れる。

——よかった……

正也も走って行った。

後ろから照らす眩しい光のせいで大和の影がコンクリートの地面に長く伸びている。

「うお、あの兄ちゃんじゃねえのか!？」

そう言って恭介も軽トラから降りる。

太陽が山間から顔を出し、本格的な光が放たれた。

三郎や正也が大和のそばに駆け寄って騒いでいる様子が、朝日に照らされて俺の目に映る。

登場に拍車をかけるような日の出の演出のせいか、知らない何かが熱く込み上げてくる。衝動が走った。

——なんてやつだ

目は瞬きを忘れるくらい開いたまま動かない。

「竜も無事なんだな、やるなあいつ」

目だけじゃない、全身が今まで感じた事のない感動を覚えて固まった。

大和から視線が離せない。

「なんか、あいつ………すげえな」

思わず呟く。

ゆっくり歩いていく恭介を追いかけて、俺もそっちに向かって走り出した。

汗で濡れたシャツを煽る風が気持ちいい。暗く包んでいた木々も太陽の光で緑色を帯びる。

やっと車が横に二台並ぶくらいの道。その真ん中に止まっている、妙な乗り物を荷台に乗せた軽トラ。

昨日からおかしな事ばかりだ。でも体中の疲れをふっと忘れてしまふ。不思議な感じがした。

「ただいまー……大助、誰か来てるの？」

夜、母さんが帰ってきた。

「あ、おかえり」

部屋から顔を出すと、母さんが玄関にばらまかれた靴やサンダルを見て首を傾げている。

紫のワンピースに黒のガウンを羽織って。母さんは街の小さなスナックで働いている。

久しぶりに顔を見た気がした。

「こんなたくさん……友達？」

自分の息子と同じ年頃とはいえ、とても誠実だとは言えない連中が狭いテーブルに飯を並べて、わいわいと飲み騒いでいるその様子をぽかんと見つめた。

「よくわかんないけど」

「珍しいわね？」

その後、大和を連れて行く俺を恭介がアパートまで送ってくれて、そのままこの狭い部屋に皆上がり込んで、意味もなく夕方まで寝ていた。徹夜しただけあつて全員爆睡だ。

今はおかずを取り合つて晩飯わ食べている。

ビールの空き缶や積み上げられた皿、漂う煙草の煙。俊一も喫煙者だ。その煙草をくわえる整った横顔が魅力的で少し羨ましくなる。

「どーも！お邪魔してまーす」

三郎が愛想良く挨拶する。

「大助、姉貴？」

恭介が箸で俺の肩をつつく。なぜか目は輝いていた。

「なんでそうなるんだよ。母さんだって」

「えっ？……モヒ助かーさん綺麗過ぎね？」

「若っ……」

恭介が目を丸くしている。

「おい見ろ、うちのババアとは比べもんになんねーよ！」

母さんは嬉しそうに笑った。台所のテーブルに手をついて晚餐の様子を眺めている。

「ごめん……いきなり、今日いろいろあってちょっとね」

「いや、別にいいけど………どういう繋がり？」

笑いながらかばんを降ろす。

「あいつが道端で……」

まだ疲れきっているのか、ソファアを占領して寝ている大和を横目で見ながら言い止まる。

棚からカップを取り出す。お湯を注ぎながら今日昨日とあった事を思い出す。後ろで騒ぐ声を俺はきつとどこかで嬉しいと感じている。

「話せば長くなる………かも」

「そうなの？」

母さんは俺が出したコーヒーをいすに座って飲んだ。

「……なんかこうなつたんだ」

「でも皆楽しそうじゃない」

「……うん」

時間と共に打ち解けることが出来て、皆に本心で心が開けた。

「大助ーっ！ビールだ、ビール持ってこーいっ」

恭介は酔いながら顔を赤くして叫んでいる。

「今持つて行くよ」

「おい恭介飲みすぎじゃねーのか？」

テーブルの上で恭介の肩をばんばん叩いて素麺をすすっている二郎。  
麺は個人的に好きみたいだった。

「おい竜、人のもんまで食うなよ！」

三郎の皿からひよいひよいウィンナーを取る筈。

「俺さ、すげー腹減ってんの。でも昨日は本当死んだと思ったんだよ！」

今回原因となり、大和に助けられた西中生の竜だ。

膝の上に大事そうに猫をかくまっている。

同い年なのに俺より背は大分低い。癖毛の黒髪にくりくりした大きい目。その下に絆創膏が貼られている。

子供みたいな奴で恭介と並べばまるで親子だ。

「お前な……少しは寝ろよ、起きたら大和さんによく礼言つとけよな」

大和に助けられた直後は意識を失ってぐったりしていたのに、目が覚めると何事もなかったかのようにピンピンしていた。

「竜って本当にトラブルメーカーだよな」

「本当それ、すぐ厄介な問題を引き起こす」

正也と俊一は部屋の隅のテレビを見ている。すると竜はきつと正也を睨んで口をとがらせた。

「なんだよ、正也だってこの間女子更衣室のガラス割ってたじゃんか！俺が黙ってなかったら今頃西中追放なんだからな、追放！」

「何お前そんな事したの？」

俊一が白い目で正也を見る。

「ち、ちげーよ！あれは」

「覗き見しようとして足を踏み外したんだよね？」

「竜っ……てめえなあっ！！」

「俺を助けるために大和さんは川に飛び込んでくれたんだぜ？」

腕を組んで寝ている大和を指差す。

「なんで助けられたお前がそんな偉そうなんだよ」

呆れる俊一。

「俺は学校に覗きの真犯人を黙ってやったのに、正也は川に飛び込んで来てくれなかったじゃないか！」

「竜、こいつは助けに行かなかったんじゃないかって行けなかったんだ」

「金槌だから、泳げないんぜ！なあ正也？」

三郎台の隅に鏡を立てて正也をからかった。髪は自分で染めたらしい。俺の髪を染めてやると言う。そんな事したら二度とグラウンドに立てない気がして遠慮した。

恭介に三郎の年を尋ねたら、ろくに学校にも行かない高校二年生だと答えた。

「おい竜、この間俊一が屋根から降りられなくなった話知ってるか？」

恭介が笑いながら爪楊枝をくわえた。すかさず俊一の方から煙草のケースが恭介めがけて飛んでくる。つづく陽気な連中だと思った。

またソファで気持ちよさそうに部屋の隅で寝息を立てている眠っている大和を見た。

——大和を助けなかったら……

ひぐらしの鳴き声も消え、静かな夜をかき消すように笑い声がアパートに響く。

いつもより部屋は一層狭く感じた。

すがすがしくも暑い日差しが窓から差し込んでいる。朝、俺はその蒸し暑さで目を覚ました。

「よお……」

顔を上げるとソファの背もたれに大和が腰掛けて、部屋から窓の外を眺めていた。

「おはよう……起きてたんだ」

目を覚ますため何度もまばたきする。

「俺今日は部活行かねえと」

足下から聞こえる恭介のいびきに思わず笑った。竜は大和の足元で猫と一緒にモーフにくるまっている。

「大助、その人」

「母さんだよ」

雪乃はソファアの横にもたれ掛かり服も着替えず眠っている。

「……なんか、迷惑かけたな」

大和が部屋を見回す。  
昨日のどれだけ夜騒いだか分かるほど部屋は散らかっている。夜遅くまで宴会は続いた。

「もともと汚ない部屋だしいいんだよ」

狭い部屋は散らかすのが簡単だ。片付けるのは物が溢れてはかどらないのに。

昨日恭介に無理に飲まされたビールのせいで少し頭が重く感じた。

「もう大丈夫なのか？」

「全然平気」

自分のモーフを母さんに掛ける。

俺には母親しかいない。父さんはトラック運転手だった。事故で死んで以来、母さんはどこか疲れた様な顔をして、昔の様には明るく笑わない。

それだけが今も気がかりだった。

「お前の母さんは……いつもあんな時間に帰ってくるのか？」

「バラバラだけど夜中か昼間が多いよ。たんまに早朝とか。仕事の仕事だから」

ろくに家事もこなす時間はない不規則な生活。俺はもう慣れていた。

「毎日すげえ疲れてるんだよ」

「でも子持ちとは思えねえくらい綺麗な母さんだな」

世間一般から見ればだらしく見えるのかもしれない。

でもかけがえのないたった一人の母親だ。

俺は心のどこかで母さんのためにバットを降っている。小さい頃のいろんな記憶が交差していくのが分かった。

暖かい部屋に差し込む太陽光。母さんの茶色いウェーブがかった髪が一段と明るく見えた。

「そうだ……」

図体のでかい恭介を踏み越えて、台所の食器棚に手を伸ばす。

「あつた」

奥の棚から茶碗を一つ取り出した。

「これ今日から大和のな」

茶碗をテーブルに置く。

「へっ？」

「母さんも俺も時間ばらばらだけど腹減ったら勝手に食っていいから」

大和は目を見開いて大助を見ている。大助は思わず後ろを向いた。

「行くところないなら俺ん家いなよ。狭いけど」

「えっ？」

小さい声でぼそつとつぶやいた。顔を見てそれが言えない。聞こえたか分からなくて言い直そうとした時。

「……でも、俺」

「だってまたどっかで倒れたりしたら困るだろ？」

頭のとっぺんの髪を触りながら大和に背を向けたまま答える。

「違うんだ。その、俺は……」

小さくなる声、何か伝えようとしてるのか顔を見なくても想像出来る。

「あ、あのさ大助……」

「俺がいつつつてんだからいいんだよ！」

住んでいると言っても二人暮らしで生活もバラバラ、狭くなってもたいした問題ではない。

きっと母さんも何も言わないだろう、仲良くやってくれると思うし夕飯は少しでも賑やかな方がいいとか考えてみる。

「……でもなっ、その」

「気にすんなって！て言ってもこんな部屋じゃ気にするよな……」

笑いながら散らかった床を見下ろす。

実際こんなアパートで大和が嫌がったりしないかどうかの方が気になった。

管理人のおばちゃんは優しいけど、隣には気難しそうないさんや、大声で入浴中に演歌を熱唱するおじさんが住んでる。

人をもてなす場所じゃないのは十分承知だった。

「今更……遠慮すんなよ？」

でも大和が倒れたらまた助けたい、また炊飯器を空にして凡人の飯を食わせどやりたい。

自分の話なんかいつかしてくれればいいし、嫌なら話さなくてもいいとまで思っている。

とりあえず既に俺は大和を“良い人”と認識していた。「俺なんか……置いてくれるのか？」

背中に浴びるその子供みたいに弱く響いた大和の声。なんだか無償にぐつと心にくる。なんとか俺の耳までたどり着いた様にやんわり響く。

——どうしてこんなに胸がいつぱいになるんだ

「キャッチボールくらい付き合ってくれよな」

なんだか恥ずかしがった。やけにそわそわする自分がいる。

「大助……」

なぜ大和に居座ってもらおうなんて考えたのかは分からない。ただきつとこいつはまたふつといなくなってしまう気がする。何かあるのかもしれない事も、それを聞かされない事も承知だ。でも構わなかった。

「グローブならあるから」

自分の声がよく聞こえる。俺と大和しか起きていない狭い部屋。

朝はやけに静かだ。

「練習……しとくよ」

さつきから床のフローリングの木目を穴があくほど見ている。  
ようやく俺は目をちらつかせた。

「俺の球、大和に取れるかわかんねーけどな！」

とにかく最初に思ったのは今までにない不思議な感覚。大和の持つ  
魅力に熱く動いた衝動のせいかもしれない。そして大和をどうして  
もほっとけないという不安や心配があった。

「大助……ありがとう」

優しい声が聞こえる。胸に響いた……ありがとう……のその一言にまた  
何かが熱くなる。

そして俺はゆっくり振り向いて大和を見る。不揃いの髪が窓から緩  
やかに流れる風になびいている。そこから見える目は間違いなく、  
まっすぐに俺を見ていた。

「よろしく……な？」

少し照れてください。笑いながら頷く。

「ちゃ、ちゃんと片付け手伝えよな！」

「りょーかい」

やる気のなさそうに聞こえるその大和の返事になんとか安心する。

気持ちよさそうに寝ている他のみんなの寝息の混じった蒸し暑い朝の何気ない会話。

そして俺と大和との生活が始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1334e/>

---

belief - Daisuke

2010年10月10日02時40分発行